

# 『一心千里』

永田 隆一

走ってれば、  
見えてくる



第109回

善乎でも焼くのかい。落穂拾いですね「お客様から印籠を渡されました」「腹にさしこみでもきたかい。引導ですわね」。

よちになりました。しかし、これは難しい。相手が心を開いてくれないと、全くプロファイリングができません。また、仕事や家族のごことで、陽と陰がころころ変わって見えなくなります。

その夢のために遠回りをするの。近道を行ったりして小さな風呂敷しかないもの。遠回りをすると決心が一つ踏み出す。勇気がいることよ、失敗の可能性も高くなる。でも、トライする。自分の気持ち、魂、プライドを本気で大切にできなくていけないこと。愚痴や言い訳を言わずに新しい扉を開け続ける。素敵です。ただし、その風呂敷もいつか、自分で決めて畳まなくてははいけません。それができる男がいいわね。

(なつえ) 姐さん。「芸者になる前の子は、舞妓と書いて、おしやくと読むよ。関西では芸子に

どちらが好きですか。見分け方は分かりますね。気をつけなければいけませんね」「はい、貧乏神

ただし、一緒にいて生気を吸い取られてくたくなことになるタイプの人がいることに気がつきました。話が長い、あなたはこつた、こつたなさい。

耳に残る毒気のある言葉を使う。言い訳が多い。エネルギーと元気を吸い取られて、気持ちとお金も使わされます。近々にいると対処法がないことにも気づきました。距離を置く、無関心を装う

## 近道と遠回り

## 本気で汗をかく

なる前の子を舞妓(まいご)と書くでしょう。神楽坂で舞妓に逢える店という触れ込みの店を見かけるけど、紙面から舞妓を連れて来るのかしら

「ほめてくれて、ありがとう」と微笑んで退散するが、正しい対処法です。

大風呂敷を畳まなければならぬ時が来る。(毎月連載)

六本木の馴染みのお店。かつて一ステージ300万円を稼いでいたテール・サウンス。皆さん70歳を超えている。プレスリーのマイウェイを物まねで歌われる。最高に素敵なのであります。しかし、花菱アチャコ、柳家金語楼、伴淳三郎真似ている人が分らない。

人たちが食べていけません。だからこそ「自分は天才だ。素晴らしいんだ」と自「暗示をかけることは生きていけません。そして本気で汗をかいているか、どう歌が届いているかを考えたならば、真剣に練習しました」。

筆者は感化されやすいところで、さっそ仕事に活用させていたたきました。「俺は最高なんだ。この装置は最高なんだ。お客様の利益に大いに貢献できるんだ。このプレゼンテーションで、この価値が伝わるだろうか」。

には距離を置くべきにします」「えっ、少し遅いまずよ。福の神は吉祥天、貧乏神は黒闍天(くろあんでん)、姉と妹です。そして、いつも一緒に行動しています。のめり込まない。ほどほどさういうことが大切です」。

大風呂敷を畳まなければならぬ時が来る。(毎月連載)

「昔ロカビリー、今はリハビリ。昔はハイカス、今は徘徊……」。笑ふしがあります。

筆者は、部下たちの言葉をさっさり訂正して差し上げました。「落ち葉拾いに言ってます」。「焼

大風呂敷を畳まなければならぬ時が来る。(毎月連載)

大風呂敷を畳まなければならぬ時が来る。(毎月連載)

大風呂敷を畳まなければならぬ時が来る。(毎月連載)

大風呂敷を畳まなければならぬ時が来る。(毎月連載)

木サミーさんとは20年を超えてお付き合い。「芸師は水商売、一握りの

神楽坂の馴染みのお店。芸者組合長の夏菜

大風呂敷を畳まなければならぬ時が来る。(毎月連載)

大風呂敷を畳まなければならぬ時が来る。(毎月連載)

大風呂敷を畳まなければならぬ時が来る。(毎月連載)

大風呂敷を畳まなければならぬ時が来る。(毎月連載)